市長コラム
～未来への架け橋～
Vol.8

本格的な夏を迎え、暑さも厳しくなってきました。五所川原の夏といえば、当市の代名詞とも言うべき「立佞武多」であり、例年であれば、多くの観光客で盛り上がりを見せるところですが、コロナ禍の影響により、昨年に引き続き本年も開催が叶いませんでした。

一方で、かねてから制作してきた新作大型立佞武多『暫(しばらく)』が先ごろ２年越しに完成し、10月９日、10日に開催予定の代替イベントにてお披露目をしたいと考えています。

そして、来年こそはコロナが収束し、市民の皆さんと共に、より進化したまつりとして、盛り上げていきたいと思っています。

★「五所川原立佞武多」の今後のあるべき姿

平成８年に地元の有志により約80年ぶりに復活し、平成10年に初代大型立佞武多「親子の旅立ち」が市街地を運行して以来、今では本県を代表するまつりに成長した「五所川原立佞武多」ですが、現在の立佞武多のルーツである背丈の高い「ねぷた」は、かつて豪商が富を競って作ったと言われ、全盛の大正13年には、ねぷたの喧嘩で20余名が負傷したという記録も残っているほど血気盛んなまつりでした。現在の「やってまれ」の掛け声は、かつての「喧嘩ねぷた」の掛け声であったと言われています。

現在の「立佞武多」が復活するまでは、各町内会や会社が制作した数十台の人形ねぶたが市街地を運行するものでした。私ごとになりますが、幼少の頃、父が営む会社でねぶたを制作し、家族や社員が一緒になって運行していた思い出が今も鮮明に残っています。その頃の「ねぷた」は、町内や地域、同僚が一体となって、皆がまつりに心を躍らせ、子どもながらに心の底からワクワクしたものでした。

本来のまつりの姿は、大人も子どもも一緒になって楽しみ、その思い出が心に刻まれ「大人になってもまつりに参加して、地域を支えていきたい」と心から思えるようなものであると思います。

「親子の旅立ち」に象徴されるように、立佞武多復活の当初のコンセプトは「健全な青少年育成に資するまつり」「子どもたちにとってふるさとのまつりとして記憶に残るまつり」といった、未来を担う子どもたちの心身の健全な成長を願うものでありました。

見るものを圧倒する迫力が魅力の立佞武多ですが、それとともに、当初のコンセプトに立ち返り、子どもたちにとっていつまでも輝かしい思い出として脳裏に刻まれ、ふるさとの誇りとして後世にしっかりと引き継がれるまつりになればと願っています。

★感染症対策実施事業者の皆さんへの協力金

前回のコラムでお知らせした「新型コロナウイルス感染症対策設備導入支援補助金」(申請期限９月30日まで)については、多数のご協力をいただき、誠にありがとうございます。市では、現在、感染対策を講じている店舗、事業所に「ごしょがわら積極的感染症対策(G.P.G)取組店」の認証ステッカーを配布していますが、それと併せて、事業者の方々の負担が少しでも軽減されるよう、適切な感染対策を実施している事業者に対し、１店舗または事業所につき10万円を支給する「五所川原市新型コロナウイルス感染症対策実施協力金」の申請を受け付けています(申請期限９月30日まで)。安心、安全を確保するための対策を地域全体でしっかりと取り組むことこそが、地域経済再生の基礎となりますので、より多くの事業者の方々に徹底した感染対策を講じていただくことを重ねてお願いします(４ページ・５ページに掲載)。

★「道の駅　十三湖高原まつり」の開催

８月22日㈰に「十三湖高原まつり」が開催されます。恒例の「十三湖産しじみすくいどり」をはじめ「つるた」「もりた」の両道の駅の友情出店もありますので、ぜひ、ご家族そろって足を運んでいただきたいと思います(３ページに掲載)。

昨年11月の高原まつりでお披露目し、大変好評を博した「市浦牛丼」は、今回の出品はありませんが、10月３日に開催予定のまつりでは、さらに美味しくなった牛丼に加え、市浦牛を使った新たなメニューが披露される予定ですので、ご期待ください。

『昭和35年頃のねぶた参加団体』の様子

昨年11月の『十三湖高原まつり』の様子